女子高校生にとっての短期高等教育と将来展望

—専門学校進学者と短大進学者の比較から—

比較教育社会学コース　長　尾　由希子

The difference of the *senmon-gakko* applicants from the junior college ones

Yukiko NAGAO

Today Japanese female high school students have two choices about the short-term higher educations. One is *senmon-gakko*, and the other is junior college. These choices have become more similar not only in the educational years but also in the educational system, because of the 1999's policy, which gives the *senmon-gakushi's* degrees to the *senmon-gakko* graduates. But what are the criteria that the female students choose the particular institution from the similar two? What is the character of the each applicant?

The aim of this paper is to examine the factors which decide the female students to choose the particular institution from the similar two. In other words, we explore whether there are some differences in their life-courses' prospects between the *senmon-gakko* applicants and the junior college ones.

The result suggests that the female students who are more sensitive to the jobs or the qualifications tend to apply to the *senmon-gakko*, and those who think their educational backgrounds important or those who belong to the upper-rank high school apply to the junior college. Additionally, the *senmon-gakko* applicants are inclined to want to work longer than the junior college ones. However, there is no difference between both applicants in the desirable age of the marriage and childbirth. That is to say, when the female students choose the short-term higher educational institution, they make the choice based on the strength of their job-orientations, but it seems that both female students are not free from a kind of the norms of the desirable age at which the female experience some life events.

目　　次

1．はじめに
2．進路の分化をもたらす要因
3．将来についての展望(1)：仕事志向とはたらき方
4．将来についての展望(2)：結婚と出産
5．おわりに

1．はじめに

本稿の目的は，女子高校生のうち，専門学校への進学を希望する者と短大への進学を希望する者を比較し，それぞれ高校時代のどのような要因によって進路を形成するのか，また，将来に関する展望に違いがあるのかどうかを検討することである。

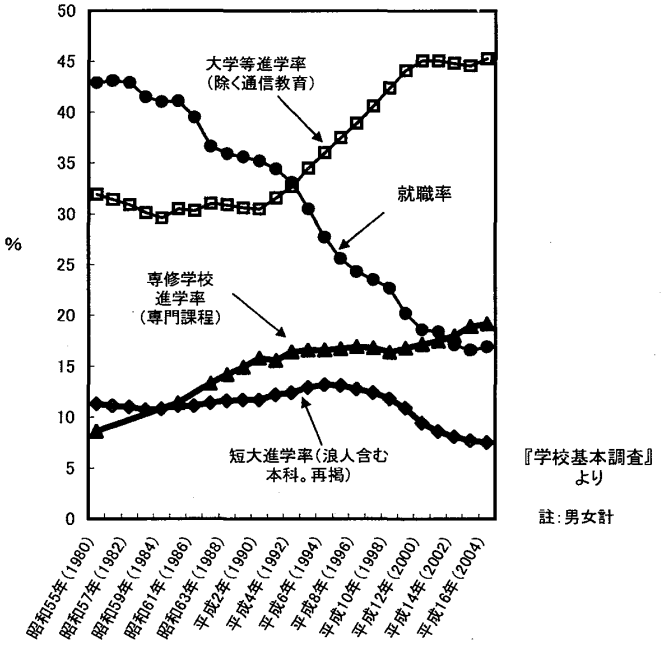
戦後，高校卒業後の進学率は増加してきた。特に女子における進学率の伸びには目覚ましいものがある。

女子に特徴的な短期高等教育機関として挙げられるのは，短期大学(以下，短大)である。短大は1970年代から80年代にかけて女子高等教育の普及に大きな役割を果たしたが，その進学率は90年代前半をピークに減少傾向にある。

これに対し，90年代以降も進学率が堅調に推移しているのが，専修学校(以下，専門学校)である(図1)。『学校基本調査』によれば，2004年度には短大への進学率[1)]が7.5%であるのに対し，専門学校への進学率[2)]は19.2%と倍以上の開きがある。

専門学校は，不況や資格人気を背景に多くの入学者を集めるようになった。加えて現在では，制度的に短大に近い処遇になっている。一定要件を満たす専門課程の修了者に限られるが，1994年には「専門士」の称号

図1　進学率・就職率の推移



を取得できるようになり，また，1999年には大学への編入も認められるようになった。短大を卒業して得られる「準学士」と，制度上はほとんど差がないと言える。

専門学校も短大も，教育年数が基本的には2年間だという点も同じである。だが，カリキュラムには違いがある。

専門学校は実学的な職業教育を主とするのに対し，短大は主に教員養成や教養教育に特徴がある。それぞれの特色に応じて，志願者にも特徴があるのではないだろうか。あるとすれば，女性のキャリア形成に対する考え方の違いが反映されているのではないだろうか。あるいは，短大も従来より資格教育に力を入れている現在では，短大の志願者と専門学校の志願者には違いはないのであろうか。

短大と専門学校それぞれの志願者にどのような違いがあるのかは，短期高等教育機関の労働市場における評価を行ったり，女子高校生の進路研究を行ったりする上で，重要なポイントだと言える。

だが，従来の研究は，志願者の特性の違いを念頭におかず，結果としての学校種別ごとの労働市場における専門性や処遇の違いを問題にしてきた。しかし，そもそもキャリア志向などの違いによって，選択する学校が異なる可能性が考えられる。このような観点による短大と専門学校の検討は，これまでに行われてこなかった。

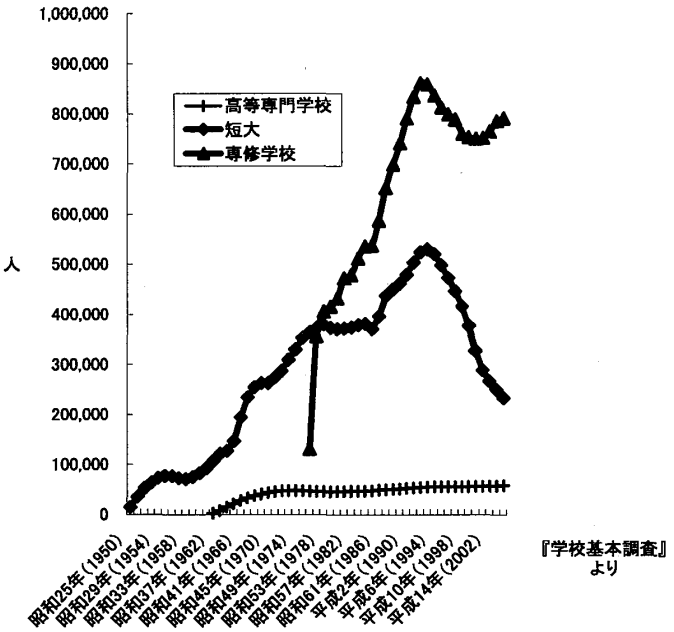
18歳にプラス2年間の教育を施す機関は複数ある。上述の短大，専門学校以外にも，特に男子を中心とした中等後教育機関の一種として，高等専門学校(以下，高専)が挙げられる。

この競合状況は，キャリア形成に関する研究において注目を集め，先行研究も一定程度蓄積されてきた。しかし，比較の中心対象は短大と高専であったし，主な関心は労働市場における処遇や専門性の違いにあった。

たとえば新谷(2001)は，高専卒男子と短大卒男子の労働市場における処遇の変化を検討している。その結果，高専卒業者は「安上がりで大卒並の高い専門性をもつ人材」として第二次産業の技術職で活用されてきたが，非技術職では処遇が低下していること，短大卒業者は高専卒業者の処遇をやや下回ってきたことを明らかにしている。そして今後は，短大で専門教育の重視が進んでいることを考えれば，短大も高専卒業者の処遇に類するものになっていくと推察している。

しかし，労働市場における短期高等教育の評価と今後の在り方を問うという目的のためには(新谷　2001, p.68)，男子に限定して高専と短大を比較するのでは不十分である。確かにいずれもトータルの教育年数は20年間である。だが，高専が中学卒業後の5年間教育であるのに対し，短大は高校卒業後の2年間教育であり，両者は制度的に別系統から派生したものである。また，在学者数の規模においても大きな開きがある(図2)。

図2　短期高等教育機関在学者数の推移



なおかつ，高専に進学するのは圧倒的に男子が中心で，短大は女子がほとんどであるといったジェンダー

による“棲み分け”が存在する。高専は第二次産業など男性労働者の多い領域が中心のカリキュラムである。だが，短大は女性を念頭においた一般教養教育に重点があり，短大卒の男子は労働市場においてかなりマイノリティである。したがって，高専卒男子と短大卒男子の比較による短期高等教育機関の評価は，代表性に問題がある。短期高等教育機関は女性の多さに特徴があり，現実的含意を考えれば，短大と専門学校を比較するのが適当である。

もちろん，高校生の短大進学希望者と専門学校進学希望者を比較した先行研究が皆無だというわけではない(尾嶋　2001など)。だが尾嶋(2001)は，1981年と1997年の兵庫県の調査をもとにした非常に少ないサンプルによる，クロス表分析などの基本的な分析にとどまり，進路形成に関する他の要因を考慮した上での説明力は定かではない。

また，尾嶋(2001)が推測したような短大から大学へのシフトは，現実にはそれほど強くは起きていない。これは，短大から大学へのシフトより，短大と専門学校の間で競合が生じているからだと考えられる。しかし，短期高等教育機関における競合の実態とそれをもたらす要因について，比較的新しいデータを用いて検証した研究は，まだない。

少子化により数字の上では大学全入時代が到来しつつあるが，成績や家計，家庭の方針など種々の理由から短期高等教育機関を選ぶ者は，依然として存在する。上述のように，2004年度は高校生の約4分の1が短期高等教育機関に進学している(高専除く。『学校基本調査』)。さらに，その中のどの機関をなぜ選ぶのかという点になると，短期高等教育機関には女子が多いという特徴から，因果関係は一層複雑になる。なぜなら，男性に比べて女性は職業との結びつきが弱く，教育を社会的な地位達成という観点からのみ見ることはできないからである(天野1983)。そのため，女子の短期高等教育に関する選好は，キャリア志向など多くの要因を考慮に入れる必要がある。

以上から，短期高等教育機関を比較検討する際には，一定のサンプル数を確保した上で次の二点を考慮に入れる必要がある。第一に，性別では女性を対象にし，教育機関については短大と専門学校を比較すること。第二に，労働市場における処遇だけではなく，キャリア志向の違いやその他の進路形成に関する要因を考慮に入れて検討すること。

そこで本稿では，専門学校への進学を希望する女子高校生と短大への進学を希望する女子高校生を対象にし，それぞれ高校時代のどのような要因によって当該の進路を選ぶのか，また，将来に関する展望に違いがあるのかどうかを見ていく。

なお，本稿で用いるデータは，厚生労働科学研究費補助金「若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究」(主任研究者　佐藤博樹)による「高校生の生活と進路に関するアンケート調査」である。

本調査は，2004年1月から3月に実施された。進学率と無業率において異なる特徴をもつ4県を抽出し，各県から無作為抽出した高校のうち，調査協力の得られた101校の高校3年生を対象にしている(7,563サンプル，回収率69.1%)。よって公私，卒業後の進路，学科などに関し幅広い類型の学校を含んでいる。

ここから，高校3年生の1月時点で専門学校への進学を希望する女子911人[3]および短大への進学を希望する女子535人[4]の計1,446人を対象として取り出した。本データの2割に相当する女子が，短期高等教育機関(高専除く)を選んでいることになる。なおかつ，専門学校を希望する女子のうち，高校1年生から一度でも短大進学について迷ったことがある者は152/911人(16.7%)，短大を希望する女子のうち，一度でも専門学校進学について迷ったことがある者は3割近く，153/535人(28.6%)である[5]。女子高校生が，専門学校と短大を秤にかけて迷っている姿がうかがえる。

2．進路の分化をもたらす要因

2章では，どのような要因により専門学校と短大に進路希望が分かれるのかを検討する。

具体的には，従属変数を専門学校希望ダミー(専門学校への進学を希望＝1，短大への進学を希望＝0)とし，学校ランク・成績・勉強時間・学校での逸脱行動・進学動機などに関する独立変数 を用いて，二項ロジスティック回帰分析を行った。なお，相関係数は十分に小さい変数を選んである。

使用する変数の一覧は表1，その基本統計量については表2の通りである。

独立変数について，一部，説明しておこう。

まず，学校ランクダミーは，普通科下位校・総合学科を基準としたダミー変数である。学校ランクは，普通科と総合学科を4年制大学現役進学希望率によって，70%以上の「普通科上位」，40%以上70%未満の「普通科中位」，40%未満の「普通科下位校・総合学科」に三分し，それに専門学科を合わせた4類型である。成績は自己申請の5段階評価である。

表１　使用変数一覧

従属変数	
専門学校希望ダミー	専門学校希望＝1，短大希望＝0
独立変数	
学科ダミー	基準：普通科下位校・総合学科
普通科上位ダミー	普通科上位＝1、その他＝0
普通科中位ダミー	普通科中位＝1、その他＝0
専門学科ダミー	専門学科＝1、その他＝0
成績	下1～上5の5段階
通塾ダミー	「塾や予備校に通って勉強した」＝1、否＝0
勉強時間（家・塾計）	高3の4～7月1週間の平均勉強時間
学校逸脱行動	高3の4～7月遅刻、サボり、欠席、校則違反の合計回数
仕事不明ダミー	「どんな仕事をしたいのかよくわからない」＝1、否＝0
進学動機ダミー	進学先について・・・
資格取得ダミー	「資格・技術が身につく」＝1、否＝0
学歴取得ダミー	「学歴を得るため」＝1、否＝0
就職時有利ダミー	「進学した方が就職に有利だから」＝1、否＝0
就職先延ばしダミー	「まだ就職したくなかったから」＝1、否＝0
興味適合ダミー	「自分の興味・関心に合ったことが勉強できる」＝1、否＝0

表２　基本統計量

	平均値	S.D.
専門学校希望ダミー	0.623	0.485
学科ダミー		
普通科上位ダミー	0.052	0.222
普通科中位ダミー	0.289	0.453
専門学科ダミー	0.495	0.5
成績	2.939	1.12
通塾ダミー	0.116	0.32
勉強時間（家・塾計）	2.228	4.133
学校逸脱行動	4.466	7.081
仕事不明ダミー	0.240	0.427
進学動機ダミー		
資格取得ダミー	0.981	0.136
学歴取得ダミー	0.273	0.446
就職時有利ダミー	0.753	0.431
就職先延ばしダミー	0.366	0.482
興味適合ダミー	0.955	0.207

学校逸脱行動とは，高校３年生の４～７月に遅刻，サボり，欠席，校則違反をした合計回数である。進路研究においては，こうした逸脱関連の指標は，学校へのコミットメントの度合いを示すものとして伝統的に用いられてきた。

「仕事不明ダミー」とは，「どんな仕事をしたいのかよくわからない」かどうかについてのダミー変数である（あてはまる＝１，あてはまらない＝０。以下同じ）。

進学動機に関するダミー変数は，進学先の評価や進学動機についての質問項目をもとにした変数である。以下に内訳を見ておこう。

「資格取得ダミー」とは，進学先について「資格・技術が身につく」と考えているか否かについての変数である。「学歴取得ダミー」とは，進学理由が「学歴を得るため」か否かについての変数である。「就職時有利ダミー」とは，「進学したほうが就職に有利だから」としたか否かについての変数である。「就職先延ばしダミー」とは，進学理由が「まだ就職したくなかったから」であるか否かについての変数である。「興味適合ダミー」とは，「自分の興味・関心にあったことが勉強できる」としたか否かについての変数である。

これらの変数を用いてロジスティック回帰分析を行った。分析結果は表３の通りである。

表３　二項ロジスティック回帰分析の結果

	B	S.E.
学校ランクダミー		
普通科上位ダミー	-0.579 *	0.327
普通科中位ダミー	-0.160	0.208
専門学科ダミー	0.022	0.188
成績	-0.049	0.062
通塾ダミー	-0.293	0.213
勉強時間（家・塾計）	-0.005	0.016
学校逸脱行動	0.033 ***	0.011
仕事不明ダミー	-0.686 ***	0.156
進学動機ダミー		
資格取得ダミー	1.032 **	0.513
学歴取得ダミー	-0.888 ***	0.149
就職時有利ダミー	0.431 ***	0.156
就職先延ばしダミー	-0.149	0.14
興味適合ダミー	0.217	0.312
定数	-0.436	0.312
−2 Log likelihood	1378.398	
Chi−Square	98.790***	
df	13	
N	1115	

*p <.100　**p <.050　***p <.010

以下，順に見ていこう。

まず，学校ランクにおいては，普通科上位ダミーが有意になっている。

普通科上位校の生徒であれば（基準：普通科下位校・総合学科），専門学校を希望しにくくなる（オッズ比0.6）。また，学歴を手に入れるために進学をするつもりだと，そうではない場合に比べ，専門学校を希望しにくくなる（オッズ比0.4）。制度上は準学士と専門士の間に大きな違いはなくなったが，現実には，生徒や進路指導をする教師にとって，短大は相対的に伝統がありカリキュラムが大学に近い，専門学校は新しい教育機関であり職業訓練機関に近いという威信イメージ

が反映しているのであろう(山野　1993, 尾嶋　2001)。

成績，通塾ダミー，勉強時間といった学業関連の変数は有意になっていない。

これは，短大には入試があり，ほとんどの専門学校には入試がないことを考えると，驚くべき結果である。先行研究の多くも，短大を進学先として大学と同列に位置づけ，大学・短大とそれ以外である専門学校といった位置づけで進路選択をとらえてきた(耳塚・岩木1986など)。しかし，学業関連の項目は，専門学校と短大との選択に影響を及ぼさないのである。

学校における逸脱行動の回数が多いほど，専門学校を希望しやすくなる(オッズ比1.0)。専門学校でも学校や専攻によって，また，特に推薦入学の場合は，生活態度や内申書を重視するところもある。だが，専門学校への入学は，総じて短大よりも選抜度が低いため，学校生活や学業へのコミットメントが低くなるのではないかと推察される。しかし，ここではこれ以上の検討はできない。

したい仕事がわからない場合は，そうではない場合に比べて専門学校を希望しにくくなる(オッズ比0.5)。進学先で資格や技術を身につけられると思っている者は，そうではない者に比べて専門学校を希望しやすくなる(オッズ比2.8)。また，就職するときにその進学先が有利だと思っている者は，そうではない者に比べて専門学校を希望しやすくなる(オッズ比1.5)。

つまり，就職に対して意識が向いている者ほど，専門学校への進学を希望しやすい。短大進学希望者はその逆の傾向があるということで，懸念される。実際には短大に入学した場合も，早い段階で就職について考えなければならないため，自分のしたい仕事が不明なまま進学する場合は，リスクがあると言える。

以上から，資格など仕事や就職に対しての志向が強い者は，専門学校への進学を希望しやすく，学歴をより強く意識する者は，短大への進学を希望しやすくなると言える。

3．将来についての展望(1)：仕事志向とはたらき方

ここでは，専門学校への進学を希望する女子と短大への進学を希望する女子で，仕事志向の強さや，希望するはたらき方が異なるのかどうかを検証する。

2章の結果と，各学校の中心的なカリキュラムを考えれば，専門学校生の方が仕事志向が強いという予測が成り立つが，果たして実際はどうなのだろうか。

まず，仕事をできるだけ長期継続したいという意欲を「仕事志向」の強さとして，専門学校進学希望者と短大進学希望者で，この度合いが異なるかどうかを検討する。

具体的には，「女性の仕事と結婚に関して，あなたはどうすることがよいと思いますか」という質問に対する7つの選択肢を，7段階の間隔尺度とみなした。

選択肢は，「仕事をせず，結婚して家庭に入る」，「結婚したら仕事をやめて，家庭に入る」，「子どもができたら仕事をやめて，家庭に入る」，「子どもができたらいったん仕事をやめ，子どもに手がかからなくなったら仕事をはじめる」，「結婚して子どもができても仕事をつづける」，「結婚しても子どもをつくらず，仕事をつづける」，「結婚しないで仕事をつづける」，以上である。後の選択肢ほど，仕事を続けることへのこだわりが強いとみなした。つまり，仕事をライフコースの中心に据える度合いに関する指標ととらえた。

すると，専門学校進学希望者と短大進学希望者では，仕事志向の強さについて確かに有意な差が認められた(Mann-Whitney の U 検定：U＝186018.500，p＝.010)。専門学校への進学を希望する女子は，短大への進学を希望する女子よりも，仕事志向が強いと言える。

また，30歳になったときに希望するはたらき方について，χ 2乗検定を行ったところ，専門学校進学希望者と短大進学希望者とで，有意な差が見られた(表4)。

まず，短大進学希望者の方が，専門学校進学希望者よりも専業主婦になりたいと考える者が有意に多い。そして，はたらき方に対する姿勢も異なる。専門学校への進学を希望する者は，「自分で事業を起こしたい」とする者や，「独立して一人で仕事をしたい」とする者が有意に多かった。これに対して，短大への進学を希望する者は，「正社員として働きたい」とする者が有意

表4　30歳時に希望するはたらき方

単位：人

	正社員	起業	独立して仕事	アルバイト・パート	専業主婦	計
専門学校志願者	468(57.0%)	75(9.1%)	124(15.1%)	45(5.5%)	109(13.3%)	821
短大志願者	312(64.3%)	22(4.5%)	45(9.3%)	27(5.6%)	79(16.3%)	485
計	780(59.7%)	97(7.4%)	169(12.9%)	72(5.5%)	188(14.4%)	1306

df＝4，x^2＝21.344，p＝.000

に多かった。専門学校は職業教育機関として特定のスキルをもった職業人を養成するために設立され，短大はカリキュラムとしては一般教養に，輩出する人材としては「浅いキャリア」の事務職(小方・金子　1997)に特色ある教育機関であったという，それぞれの教育機関の特徴を反映していると言えるであろう。

つまり，専門学校への進学を希望する女子高校生においては，「手に職」としての仕事志向が，短大進学希望者よりも強いと言える。

4．将来についての展望(2)：結婚と出産

上では，専門学校進学希望者と短大進学希望者のはたらき方に関する展望の違いを見たが，ここでは，結婚や出産といったライフコースイベントに対する考え方に，違いがあるかどうかを見てみよう。

「あなたは何歳ごろまでに，次のことをしたいと思いますか」という質問への回答について差がないか，ノンパラメトリック検定である Mann-Whitney の U 検定によって確認した。

3章で見たように，専門学校進学希望者は仕事志向が強いため，短大進学希望者よりも高い年齢を回答するのではないかという予測が成り立つ。

しかし，結婚を希望する年齢についても(Mann-Whitney の U 検定：U＝191244.500，p＝.454)，第一子の出産を希望する年齢についても(Mann-Whitney の U 検定：U＝187433.500，p＝.769)，有意な違いは見られなかった。なお，結婚希望年齢の平均は，専門学校進学希望者で25.2歳，短大進学希望者で25.0歳，第一子出産希望年齢の平均は，専門学校進学希望者で25.9歳，短大進学希望者で25.8歳であった。

3章の結果と合わせて考えれば，専門学校進学希望者は，結婚や出産を経てもはたらき続けたいと考える傾向にあると言えよう。だが，別の見方をすれば，専門学校であるか短大であるかによらず，また，仕事志向の強さとは関係なく，女性のライフイベントについて依然としてある種の年齢規範が存在する，ということもできる。

5．おわりに

以上の検討から，短期高等教育機関への進学を希望する女子高校生において，就職や仕事に意識が向いている者は専門学校への進学を希望しやすく，学歴を重視する者は短大への進学を希望しやすいと言える。

そしてこの傾向は，将来，仕事をどれだけライフコースの中心に据えるかということや，はたらき方の希望にも反映される。専門学校進学希望者には，仕事志向が強く独立起業を望む者が多く，短大進学希望者には，正社員や専業主婦を望む者が多くなる。しかし，このようにキャリア形成についての展望には違いがあるものの，結婚や第一子出産の希望年齢には，有意な差は見られなかった。

また，短期高等教育機関の競合という観点から見ると，次のようなことが言える。

1章でも述べたように，短大と専門学校は，90年代後半にかけて制度上の位置づけも近接し，はっきりとした競合関係にある。しかし，特に2章で明らかになったのは，2004年度卒業の女子高校生の認識では，それぞれの短期高等教育機関に対する従来からのイメージが，依然として生きているということである。

つまり，制度上は短大と専門学校の境界が緩やかになった現在でも，女子高校生は，短大は学歴では専門学校より相対的に上位にあると考え，専門学校は資格を身につける機関だと考えて，進学先を検討している。しかし，成績など学業関連の項目は影響を及ぼさない。

今後の課題は，以下の二点である。

第一に，本稿では短期高等教育機関における進路分化を比較検証したが，これを全体的な進路選択の文脈に位置づけることも必要である。他の進路，たとえば4年制大学進学や就職なども含めた上で，また，男子とも比較し，短期高等教育機関を選好する要因を調べることが重要である。この際，調査項目の制約などから本稿では十分に検討できなかったが，家計や親の教育程度，教育期待なども重要な変数となるであろう。

第二に，本稿では専門学校進学希望者と短大進学希望者のキャリア展望について見たが，異なる短期高等教育を修了した女性におけるキャリア形成の実態に関しては，今後検討する必要がある。本分析で用いたデータのもとになる調査は，パネル調査として計画されており，追跡調査を待って左記の課題を補足検証できる予定である。

〔本稿は厚生労働科学研究費補助金「若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究」(主任研究者　佐藤博樹)による研究成果の一部である〕

(指導教官　廣田照幸助教授)

注

1)浪人も含む。また，データの制約上，男女計。
2)データの制約上，専修課程，男女計。
3)うち1月時点での進学先決定者777人，進学先未定者134人。
4)うち1月時点での進学先決定者450人，進学先未定者85人。
5)専門学校への進学希望が一貫している者は，911人中，進学先決定者182人と未定者34人。短大への進学希望が一貫している者は，535人中，進学先決定者61人と未定者17人。

引用・参考文献

天野郁夫　1983「学歴の地位表示機能について」『教育社会学研究』第38集，pp.44-49.

藤田英典　1982「教育と職業の機能的関連　―専修学校の意義と限界」雇用促進事業団雇用総合研究所『雇用と職業』39号，pp.1-5.

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著　2000『高校生文化と進路形成の変容』学事出版.

吉川徹　2001「第4章　ジェンダー意識の男女差とライフコース・イメージ」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房，pp.107-126.

木村邦博　2005「「女性にとっての学歴の意味」再考：教育・就業と性別役割意識の関連の時系列比較」片瀬一男・木村邦博・阿部晃士編『教育と社会に対する高校生の意識：第5次調査報告』東北大学文学部教育文化研究会，pp.57-70.

小杉礼子　1995「短大・専門学校進学と職業」文部省大臣官房調査統計企画課編集『教育と情報』No.453，第一法規出版，pp.12-17.

耳塚寛明・岩木秀夫　1986『国立教育研究所紀要　―専修・各種学校入学者増加メカニズムの高校階層別分析』第112集，国立教育研究所.

文部科学省『学校基本調査』.

小方直幸　1994「短大卒女子の職業キャリアと短大教育の選択」『教育社会学研究』第54集，pp.107-125.

小方直幸・金子元久　1997「『女子事務職』の形成と融解　―短大卒を中心に」『日本労働研究雑誌』445号，pp.2-12.

尾嶋史章　2001「第1章　進路選択はどのように変わったのか―16年間にみる進路選択意識の変化―」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房，pp.21-61.

新谷康浩　2001「高度成長期以降の労働市場における短期高等教育の評価とその変化　―高専・短大卒業者の処遇に着目して―」『産業教育学研究』第31巻第1号，日本産業教育学会，pp.66-74.

東京都労働経済局総務部企画室　1994『東京の労働'94』東京都労働経済局総務部企画室.

山本一彦　1993「専門学校教育の今日的意義と課題　―短期高等教育機関としての専門学校の位置づけをめぐって―」『社会学論叢』No.117，日本大学社会学会，pp.91-107.

山野晴雄　1993「専門学校への進路指導」『進路指導』第66巻第9号，日本進路指導協会，pp.21-26.